

偏見や差別について考える

～人権感覚を磨き、「差別の芽」に気づくために～

グラフからどんな社会が見えてきますか？

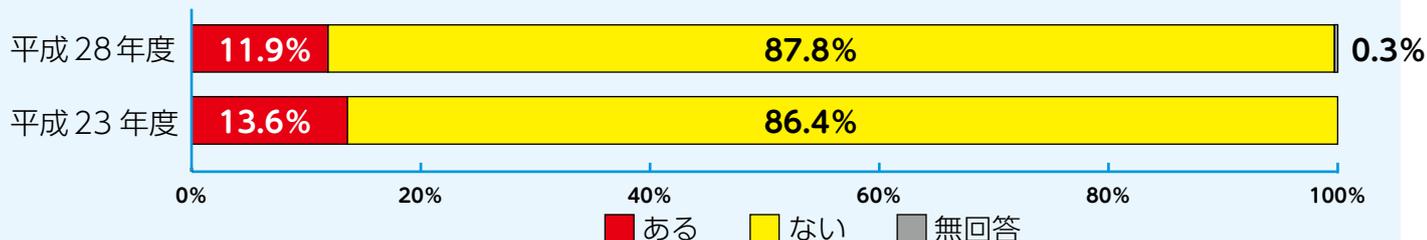
グラフ① しが Web アンケート調査（令和2年）結果より

「新型コロナウイルス感染症に関連して、感染者、医療従事者、帰国者、外国人など（いずれもその家族を含む）への不当な差別や誹謗中傷、いじめなどを見聞きしたことがありますか」



グラフ② 人権に関する県民意識調査（平成28年）報告書より

「あなたは、ここ5年以内で差別や人権侵害を受けたことがありますか」



グラフ①は、滋賀県が行った「しが Web アンケート調査」（令和2年5月）の結果です。22.8%の人が新型コロナウイルス感染症に関連した差別や誹謗中傷などを見聞きしたと回答し、差別などの人権侵害が発生していることがわかります。

グラフ②は、滋賀県が行った「人権に関する県民意識調査」（平成28年9月）の結果です。平成28年度は11.9%の人が「差別や人権侵害を受けたことがある」と回答し、平成23年度の結果と大きな変化が見られませんでした。これは40人の集団に例えると、約4～5人が差別や人権侵害を受けていることに相当します。



ジンケンダー
（滋賀県の人権啓発キャラクター）

次の調査は令和3年だよ。どのように変化していくか注視しよう。

新型コロナウイルス感染症が広がる中で、新型コロナウイルス感染症に関わる人（感染者やその家族、濃厚接触者、医療従事者など）を排除したり攻撃したりする差別が起きています。このように新型コロナウイルス感染症は、差別を生み出してしまふ人間の弱さを浮き彫りにしました。

この資料は、エピソードやワークを用いて、自分自身を振り返ったり互いの考えを交流したりすることで、自分の中にも差別につながる芽があることに気づくことをねらいとして作成しました。職員研修をはじめ、多くの場で活用されることを願っています。

何か気になることはありませんか？

ア 私は、新型コロナウイルスの感染が拡大する中で不確かな情報やデマが飛び交い、誰かを排除したり攻撃したりする偏見や差別が生まれているというニュースを聞く度に心を痛めていました。家族にも「感染した人を探し出すような行為自体が、その人や家族をいっそう苦しめることになるよね。こういうことをする人がいるから、病院へ行くのをためらったり、感染経路を隠したりしてますます感染が広がっていくんや。」と話していました。

しかし、先日「新たに感染が確認されたのは、A市に住む10代の女性で…」というニュースを聞いた時、とっさに「うちの市の10代？どこの学校の何年生やる？うちの子の友だちじゃないよな。」と妻に確かめようとしている自分がいました。



イ 僕は日系ブラジル人5世です。両親のルーツは日本ですが、僕が小1で日本に来るまでブラジルにいたので、家での会話はほぼポルトガル語です。僕も初めは日本語がわからなかったけれど、中3の今は日頃の会話には困りません。

休日に僕が家族と買い物に出かけているところを見た近所の方が、僕にこんなことを言いました。「昨日お店でご家族といるところを見かけたわ。ご両親はまだ日本語できないの？」僕は「まだ少し難しいようです。」と言いました。すると、「早く日本になじまないと子どもがかわいそうよね。でも、顔は日本人に見えるからよかったわね。あ、このあいだごみの出し方が間違っているご家庭があったんだけど、おうちの人に聞いていてくれる？」と言われたので、僕は「…はい。」と答えました。



ウ 「尊敬する人は誰ですか」と尋ねられたら、私は「母です」と答えてきました。母は、周囲からの信頼が厚く、私が悩んだとき迷ったときは、いつも正しい道を示してくれる道しるべのような存在です。中学時代から交際していたBさんとの結婚を相談したときには自分のことのように喜んでくれました。

Bさんの転勤が決まったので、転勤先の近くに新居を購入することにしました。夫婦であれこれ話し合い、最終的に土地が安いということで〇〇町の物件に決めることにしました。事後報告のつもりで伝えに行ったところ、母から「問題のある地域かどうか、ちゃんと調べてから決めたの？家選びは一生のことだから、子どものことも考えないとダメよ。」と聞かれました。

母の言うことに今まで間違いはないと思ってきましたが、今回は何かモヤモヤしたものを感じています。



エ 私がボランティアで車いすを利用しているCさんの介助をして一週間が過ぎました。大変なこともあります。やりがいを感じています。

ある日、欲しい本があるということで、Cさんと一緒に本屋へ向いました。Cさんが本を探していると、店員さんが私に向かって「何をお探しですか。」と話しかけました。私が「〇〇という本を探しています。」とこたえたら、店員さんはすぐにその本を持ってきてくれました。親切な店員さんだなと思いました。私が「お目当ての本があってよかったね。」とCさんに話しかけると、Cさんは「うん。」と言いましたが、なんだかうかない表情でした。私は、どうしてCさんがうかない表情をしているのか不思議に思いました。



進め方

- ・ 下の1～4について、「自分がそう思う」レベル (%) の位置に○をつけましょう。(全く思わない：0% ととても思う：100%)
- ・ そのレベルに○をつけた理由を考えてみましょう。
- ・ 結果をもとに話し合ってみましょう。

項目	「自分がそう思う」レベル (%)
1 自分はどちらかといえば「ふつう」だ。	0 25 50 75 100 (%)
2 「A型の人は几帳面だ」など、血液型による性格判断を信じるほうだ。	0 25 50 75 100 (%)
3 結婚式をするなら仏滅は避けたい。	0 25 50 75 100 (%)
4 「若々しい」「実年齢よりも若く見える」と言われたらうれしい。	0 25 50 75 100 (%)

「差別の芽」に気づきましょう

- 1 人は個性や特長をもち、一人ひとり違っているものです。しかし、多数派が「ふつう」で、少数派は「ふつうでない」と捉え、「これがふつう」と感じる価値観そのものに自分自身の思い込みや決めつけがありませんか。「ふつう」であることに安心し、「ふつう」でないものを排除しようとする態度は、差別やいじめの原因になります。
- 2 血液型によって性格を分類する考え方がありますが、科学的な根拠はありません。「A型の人は全員几帳面」というようなステレオタイプなものの捉え方(例えば「〇〇の人は〇〇だ」「〇〇の地域の人は〇〇だ」「〇〇の仕事の人は〇〇だ」など)は、ある集団に属する人に対してマイナスイメージを抱いてしまうことにつながることがあります。
- 3 科学的な根拠がなく、「昔からそうだから」「みんながそう言う(している)から」という理由だけで、私たちの行動を制限している風習や迷信は今も残っています。特定のものや人を遠ざけようとする風習や迷信が偏見や差別につながっていないか、今一度考えてみるのが大切です。
- 4 「若々しい」と言われるとうれしくなり、逆に「老けた」と言われるとうれしくないというように、加齢という現象をどちらかという望ましくないと思う人が多いのではないのでしょうか。しかし、無自覚に、「老いる」ことにネガティブな感情を抱くことは、高齢者に対する偏見や差別につながってしまう場合があります。

このような視点をもって、左のページのエピソードを読み返してみましょう

自分も他者も大切にできる人を育てるために

このチェック項目のように日常の様々な場面に「差別の芽」はあり、「差別は差別する人の問題で差別をしない自分には関係がない」ということはありません。何気ないことへの気づきの積み重ねによって人権感覚は磨かれていきます。「差別の芽」が自分の中にもあることに気づくには、日ごろから自分が差別の土壌をつくり出していないか意識することが大切です。そういった意識で子どもたちに接することで、一人ひとりが大切にされる学級・学校の礎が築かれ、自分も他人も大切にできる子どもを育てることにつながります。

私たちは人権を尊重する生き方のロールモデルです

まずは自分自身の言動を振り返ってみましょう。それが差別に気づき、なくしていくことへの第一歩です。

ハンセン病問題から学びましょう

ハンセン病は「らい菌」によって引き起こされる慢性の細菌感染症で、主に末梢神経が麻痺したり、皮膚に病変が現れたりしますが、発病することはまれな病気です。昔は衛生状態や栄養事情が悪かったために感染症が広まりやすく、また有効な治療薬がなかったため、「不治の病」として恐れられていた時代もありました。

現在は、日常生活で感染する可能性はほとんどなく、適切な治療を受ければ必ず治る病気となっています。しかし、当時は、無らい県運動*によるハンセン病患者の強制的な入所や家が真っ白になるほどの消毒が行われたことで、周囲の人々は恐怖心を植えつけられました。家族は近所づきあいから疎外され、結婚や就職を拒まれたり、引っ越しを余儀なくされたりすることも少なくありませんでした。

また、元患者に対する差別も根強く残っていました。今なお家族の就職や結婚などの際に差別が及ぶなどハンセン病に対する偏見や差別が根強く残っており、療養所の外で暮らすことに不安を感じている人もいます。

現在起こっている新型コロナウイルス感染症による様々な人権侵害は、ハンセン病に関わる偏見や差別などの問題と類似している点が多くあります。ハンセン病問題の歴史を振り返り、同じ過ちを繰り返さないようにしていかなければなりません。そのためには、人を排除するのではなく、一人ひとりが新型コロナウイルス感染症を正しく理解し、人権尊重の精神を持つことが大切です。

*無らい県運動：昭和初期にハンセン病患者をゼロにすることを目的に行われた患者の強制収容運動。

(滋賀県「ハンセン病問題を正しく理解してください」を参考に作成)

全国水平社宣言を知っていますか？

大正11年(1922年)3月の全国水平社創立大会で読み上げられたこの宣言では、人が敬い合うことで差別のない世の中をつくと謳っています。当時、海外では、日本における最初の人権宣言として注目されました。

差別をなくすには、一人ひとりが「差別の芽」となる意識に気づくことが大切です。そのためには、水平社宣言に込められているように、すべての人が意識の根底に人権の尊重を視座としてもつことが大切ではないでしょうか。水平社宣言の現代語訳の一部を紹介します。

私たちは、この世の中が、私たちが差別することのみにくさに気づかない人々や、差別されることのつらさに気づかない人々が多くいる冷たい世の中だということを知っています。だから私たちは、心から人間の尊さやあたたかさが大切にされる、差別のない世の中を心から願うのです。水平社はこうして生まれました。人の世に熱あれ、人間に光あれ。

(現代語訳 「部落問題学習の授業ネタ2」解放出版社より)

滋賀県ホームページに当課作成のリーフレットや人権学習指導資料を掲載しています。自身の学びや職員研修などにご活用ください。



「新型コロナウイルス感染症を通して学ぶ」人権学習指導資料



「子どもの見方・関わり方を考える」リーフレット



「インターネットによる人権侵害」リーフレット



「性の多様性を考える」リーフレット



「自尊感情を育む」リーフレット



「いじめや差別を許さない学校づくり」リーフレット

